

卷之一

Tome premier

序論

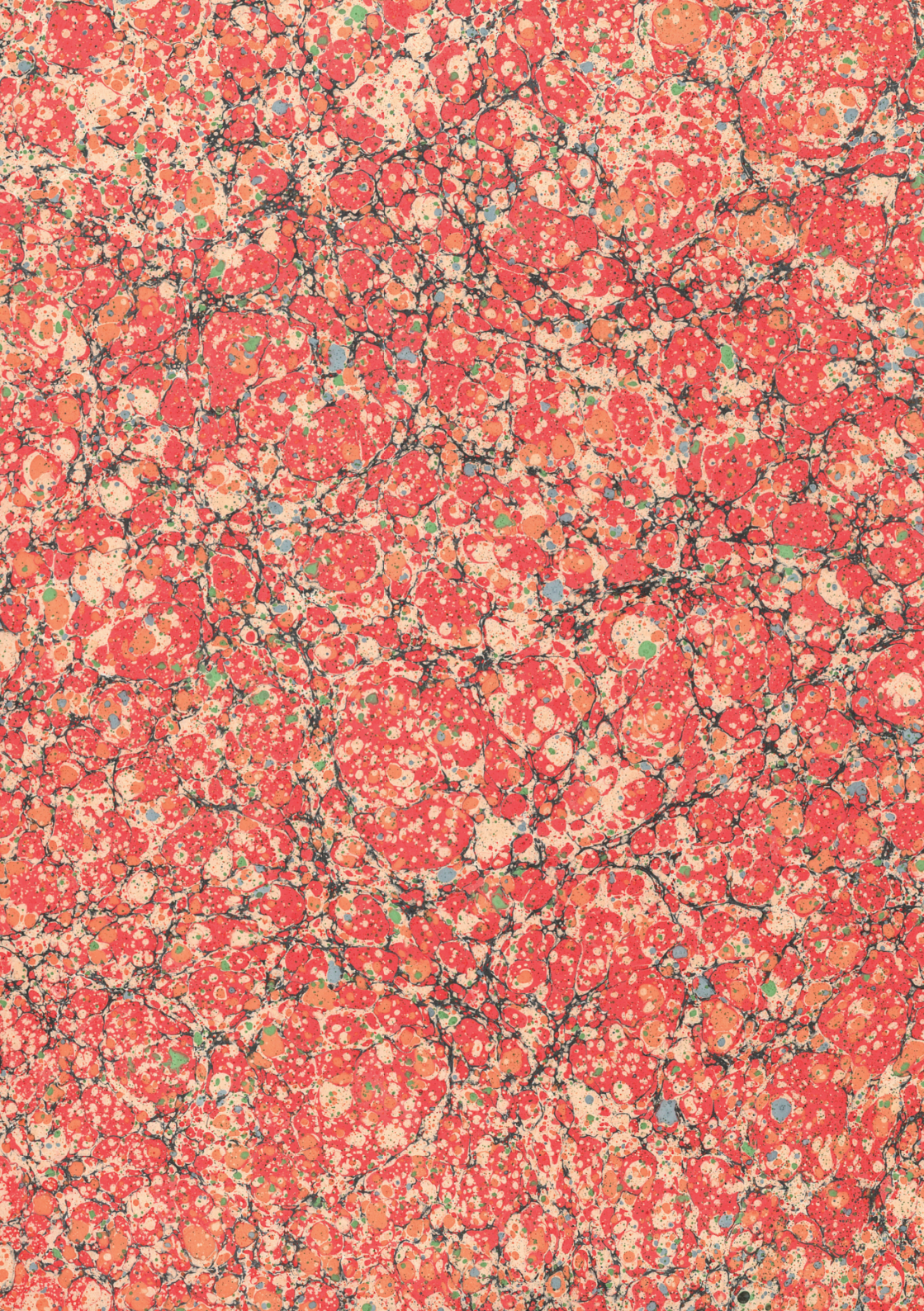
Discours
préliminaire



文・イラスト
東風

ばんしょうのかがみ

万象の鑑



万象の鑑

ばんしょうのかがみ

卷之一 序論

DISCOURS
PRÉLIMINAIRE.

*SPECULUM OMNIS,
PAR UNE SOCIÉTÉ DE GENS DE LETTRES.*

Mis en ordre & publié par M. DUPRÉ & M. D'AUBIGNÉ.

TOME PREMIER.



OMNIVERSE,
文・イラスト 東風

MM. X. VIII.

目次

	万象の鑑 序論	5
1	不死の將軍	11
2	革命の兆し	17
3	孔雀の御旗のその陰で	27
4	大図書館の虜囚は惑う	37
5	ノートルヴィルの工学者	50

登場人物

ジル・デュプレ	〈帝国〉の魔術師
ユベール・ドービニエ	同上 ジルの介添人
ウーヴェ＝アロイス・ゲルトナー	〈帝国〉の工学者 ジルの旧友
ラウル＝モーリス・ペルグラン	〈帝国〉陸軍元帥
エルネスト・メルル	〈帝国記録院〉院長
パトリス・フロケ	〈学堂〉所属の魔術師
リュシー	酒場 〈火竜 <small>かりゅう</small> の蹠 <small>くろふし</small> 〉の女店主
ウスターシュ	酒場 〈火竜 <small>かりゅう</small> の蹠 <small>くろふし</small> 〉の調理人

万象の鑑
序論

乾いた風が身体中に強く吹き付けていた。項垂れた顔を引
き起こす気力さえなく、一人の男が荒野の只中に瘦せた裸足
を投げ出して座り込んでいた。男は裾の長い、縫い目の解れ
かけた、ひどく粗末な白装束に身を包んでいる。土埃の色を
した蓬髪が、髭と垢に覆われた顔を隠していた。

彼の他に、およそ生き物の気配はない。頭上に広がる天球
は灰色の雲に覆われて方角も定かでなく、枯れ草が這い躰る
大地が果てしなく続いていていた。

男は長い間、身動きひとつしなかった。だが胸中にいくら
かの熱が残っているのは確かだった。その熱とは焦燥だった。
今すぐ身を起こさねば間に合わない、という焦りだけが彼の
身体の中にどろどろと燻り、それでいて自分が何に急いでい
るのが皆目分らない。男を取り巻く風の音と思われたもの
は、彼自身の喉から絶え間なく漏れ出る呻き声であった。

それからまた長い時間が経った。

(――しなければ・ならない)

不意に、抱えていた焦燥が言葉を得た。その瞬間、地に垂
れ下がった指先がびくりと動いた。

辛うじて持ち上げた、骨と皮ばかりの両手を見下ろす。胼胝

に節くれ立った指は、彼の人生の集積だった。裏を返せば、
自分がこれまで培ってきたものを証明する手立ては他に何も
なかった。

「……あ、……」

不意の違和感。

二本の腕がある。両手には十指が揃っている。だが左右の
親指だけひどく青褪めていた。拳を握ろうと力を込めると、
強張ったままの母指球には感覚がなく、二本の親指が微動だ
にしないことに気が付いた。残った八本の指が震え、赤子よ
りもぎこちない弱々しさで開閉する。

そこで彼はようやく、すべてを奪われたことを悟った。自分
が築き上げてきたものを、これから目指すべきだったものを。

「う、あ――」

実際の発声以上に多く唇が動いたが、言葉になる音は少な
かった。

「わ……わたし、は、」

自分が何者であるかを問うより早く、身体が動き出して
いた。そこにあるべきものが見つからないとばかり、膝を突き、
地面を這い回り、そこから中へ闇雲に手を伸ばす。

(このままでは・死んでしまう)

彼は焦っていた。

(わたしは・書いていなければ・死んでしまう) (何を?)

(わたしが・書いてやらねば・死んでしまう) (いったい何が死んでしまうというのだ?)

今や彼はただ、その衝動だけに突き動かされていた。地を踏み締めては転び、肌の至るところに傷を増やして立ち上がる。

(行く宛てなどない) (それでもわたしは行かねばならない)

よろめき、足を縛もつれさせながらも、男は泥濘ぬかるみから逃げるように走り出す。風に煽ふられた襤褸ぼろの隙間から、男の胸元に刻まれて間もない徒刑囚の烙印が覗いた。

(書き続けなければ……)

我らの目指した革命を。

我らの苦闘の日々を。

我らの敗北と挫折を。

われわれ自身のすべてを!

~~万象の鑑~~



古の時代、もっとも多くの人間に話された言葉で「際限のない実り」を意味した「ノタウィア・マニス」は、自然科学の発展とともにこの世界そのものを指す語に転じた。

「実り」とは、土地の肥沃さのみを表したのではない。この世界には、超自然的な能力を持つ者がしばしば現れた。ある者は獣より速く遠くへと走り、ある者は瞬きより早く難解な数式を解き明かした。手のひらから鉄を生み出す者があれば、宙に草木を芽吹かせる者もあった。

ノタウィア・マニスという言葉が語源とおりの用法で使われていた時代から、そうした異能者が持つ不可思議な力は魔力と呼ばれていた。

魔力は異能者の体内のみならず、世界中に満ち満ちていた。異能者を通じて魔力をエネルギーに還元し、「魔導工学」の名の下に魔力仕掛けの機械を発明した人間は、ノタウィア・マニスの各地に広がった文明を急速に発展させてきた。

異能者が世界の人口の三割近くを占め、魔力があらゆる社会の基盤となったにもかかわらず、ノタウィア・マニスに魔力が遍在する要因はいかなる学問を以てしても不明だった。

魔力が引き起こす現象は多種多様なれど、少なくともその使い手を判別することは容易かった。異能者たる彼らは、一

人残らず血族の遺伝から外れた碧眼を産まれ持っていた。宿した魔力は虹彩の青色が濃く深いほど強大となり、常に人の心を、国家を、果ては世界の歴史さえも揺るがした。

故にこのノタウィア・マニスにおける人生の起伏は、産まれて瞼を開いた瞬間に決まると言っても過言ではない。人間は祝福と怨嗟の天秤の上であり、誰もが酷薄なまでに命を量られるようにして産まれてくる。

いつの頃からか、青い瞳の持ち主たちは誰からともなくこう呼ばれていた——「魔法使い」と。

1 不死の將軍

北

方大陸を横断する山脈の、万年雪きらめく尾根から吹き下ろす風が和らぐ季節。ノタウィア・マニスの北部を占める〈帝国〉の寒冷な大地も、ようやく鮮やかな緑に覆われる春を迎えた。

〈帝国〉はいかなる出自をも問わず、ただ魔力のみを身分の基準とする世界唯一の国家である。体系化された学問によって魔力を統御する術を修めた魔法使い——「魔術師」を主権者とし、皇帝の支配下で堅固な階級社会を永く保持してきた。

その高い軍事力で覇権を手中に収めた〈帝国〉と云えども、一切の脅威を知らぬ訳ではない。

ノタウィア・マニスに遍在する魔力は定期的に沈静し、魔法使いの異能や魔導機械の動作を鈍らせる。魔術学において「停滞期」と名付けられた不活性化の周期とメカニズムは、魔力にまつわる未だ解明されない謎の一つである。何の前触れもなく訪れる停滞期は、およそ半年から一年に渡って魔力の効果を半減させ、深刻な場合にはほとんど無力化してしまう。

何人もの研究者が停滞期の予測や軽減を試みたが、いずれも徒勞に終わった。再活性から一年も経ずに停滞期がやってきたことがあれば、十年近く安泰で過ごしたという記録もある。魔導工学の進歩によって機械の動作はある程度の安定化を実現したものの、停滞期は現在も変わらず世界的な休戦期間に定められており、〈帝国〉もまた例外ではなかった。

時に帝国暦九百十四年。国内の天文台で地平線の全周における魔力の発光現象が観測され、二年あまりの長い停滞期が終わる兆しを見せていた。

帝都の中心に位置する白亜の宮殿は鋭い切っ先のように天高く聳え、城郭で囲われた街の周縁部へ向かって裾野を広げるなだらかな丘陵には、上流階級の街区が整然と建ち並んでいる。漆喰の壁が照り返す光が落ち着いた赤や黄の屋根を際立たせ、宮殿の周辺を野花のように彩っていた。

麗らかな陽気が降り注ぎ、短い春を謳歌する街中であって、〈帝国〉陸軍本部のこの一室ばかりはいつ何時も身を冒すように空気が張り詰めている。国の中核を成す大魔術師、陸軍元帥ラウル・モーリス・ペルグランの執務室である。

ペルグランは軍の統率のみならず、精神的な支柱としても

帝政を牽引してきた隻眼の偉丈夫で、類い稀なる魔力を武器に齡七十を過ぎた今も戦場に立つ。左頬から突き上げるように目玉を貫いて側頭部まで抉った大きな古傷が、彼の威容と不死性とを象徴するのに一役買っている。残された右目は眼光鋭く、深い紺碧を湛えていた。

よく晴れたその朝、老将の頑健な指が大きなフォリオ判の革装本のページを一枚、また一枚と繰っていた。碎木バルブのかさついた紙が捲れる他に音はない。重厚な机の前に控えた壮年の補佐官の面持ちには神妙で、色の薄い碧眼が気圧されまいと正面を見据えているのが見て取れた。

ややあって、徐おもむろに書物から顔を上げたベルグランが口を開く。

「……呆れたものだ。統制局がこいつを通すとは」

「は。〈帝国〉魔術師にあるまじき失態です」補佐官が応える。

「刊行前から何やら騒がれていると思ったが……想像以上だったな」

信仰や国家を差し置いて、取るに足らない羽虫や、忘れて久しい無人の小島が第一巻の先頭を飾る百科事典など前代未聞だった。数百年に渡って世界中の書物を蒐集してきた〈帝国〉の、広大無辺な書庫にさえ一冊も見つかりはしないだろう。

九百ページを超える厚みの中に、博物学をはじめ、地理や歴史、哲学、天文学、医学、工学、芸術、種々の伝承、日用品や子供の遊戯に至るまで、ありとあらゆる「A」から始まる語句が二段組の活字に凝縮されている。

造本は百科事典の例に違わず堅牢で、表紙を覆う子牛革ツェッパの斑のある風合いと、見返しを飾った赤いマーブル紙の対比が美しい。紙面の各所に絵画的な彩りを添える装飾活字と、麗大な内容にもかかわらず誤植の見られないテクストに、熟達した職人の技術を感じさせた。

背表紙には、革表紙と本文を繋ぎ止めるバンドが六つの水平な隆起を作っている。そこには流麗な草花の図案と共に、この事典のタイトルが箔押しされていた——『万象の鑑』ばんしょうのかん。ノタウィア・マニスの名と同じ古典言語に由来し、当世においては些か古めかしく、仰々しいネーミングだ。

だが彼らがこの事典に見出した異様さは、分野を問わず微に入り細を穿って収められた項目ばかりではない。記事ごとに異なる執筆者たちが記した本文の、熱意に満ちたその行間にあった。

一見すると逸脱したようには見えない文章の各所が、魔術的な音韻と文字列を成すように組み上げられているのだ。



参照による記事同士の繋がりが呪文の更なる呼応を産み、計算された組版が魔法円を織り成している——要するにこの書物は、紛れもなく「百科事典を装った魔術書」だったのである。

本来、〈帝国〉内での書籍や文書の公刊に際しては〈出版統制局〉による検閲が行われている。統制局に在籍して検閲を行う魔術師を「検閲官」といい、歴史や神学、自然科学など、学問の分類ごとの担当者が提出されたすべての原稿に目を通す。公的な刊行物を除き、統制局を通過せずに国内を流通する出版物は例外なく違法であり、著者はおろか、印刷工や書籍商までもが厳罰に処される羽目になる。帝政を脅かさんとする出版物は検閲官によって悉く発見されて葬られ、そうして〈帝国〉の社会体制は永く守られてきた。

言わば思想の番人ともいうべき検閲官は、諸学以外にも魔術の専門知識を有している。中でも『万象の鑑』のように、文字や発声を起点に発動する「言語魔術」の知識に秀でた者は「特級検閲官」として重用され、反体制的な活動を補助すると判断された魔術書は徹底的に排除されていたはずだった。「どうやら、検閲官を欺くほどには小手先が利く人間の仕業らしい」皮肉めかしたベルグランの右目が、見開きを埋め尽く

した活字を縦横に素早く追う。

魔術の構文としては非常に複雑で難解だが、実効を現す条件は至って単純だ。ただ読み、文章として知覚さえされればいい。

言語魔術は基本的に音読による詠唱を起点とするが、より高度であれば黙読の「声なき声」をも詠唱と見なす。つまり碧眼の魔力を持たない者でも、識字さえ可能ならば「魔術の発動」自体は出来ずとも「魔術の効力を増幅させる詠唱者」の一人に加えることが出来てしまう。

陸軍内で話題に上った当初、『万象の鑑』は国内への流布を狙っていると思われていた。しかしこの事典には、一冊で金貨二百枚と高価な値段が付けられている。それだけの金があれば、魔力のない庶民ならば半年は暮らしてゆける。市井の人間には文字が読めない者も珍しくなく、裕福で学識ある〈帝国〉魔術師を標的としていることは容易に察せられた。

「斯様な代物が帝都に出回ると思うと、ぞっとせんな」
下手に読み進めれば紙の内外にいかなる影響が及ぶとも知れず、ベルグランは事典から視線を外した。

この百科事典は、これまで発禁処分とされた幾多の魔術書を凌駕するほどの、あまりに緻密な技巧によって形作られている。「読者と書物の相互関係からなる回路網を形成し、大

規模な魔力の蓄積および増幅装置として機能する」——そうして確保した巨大な魔力をいかなる目的に用いるにせよ、ペルグランが見立てた『万象の鑑』の効力は、間違いなく禁書として扱われるべき規模だった。このまま第二巻以降の刊行が続けば、影響力は加速度的に拡大してゆくだろう。

ペルグランは椅子に深く背を預けた。

「^{いんじ}印璽や検閲官の記名がないところを見るに、記事の内容をそれ自体も相当採めたようだ。『特権階級 Aristocratie』に『無神論 Athéisme』……さぞ大勢が黙ってはいないだろうよ」

通常、検閲を正式に通過して認可された書物には統制局長の印璽が押され、検閲官の承認文が印刷されることになっている。その一方で、著作者と検閲官の社会的な立場を巡って「正式な認可は与えられないにせよ、無断の出版ではない」として、統制局に検閲の過程を記録として残すだけで印璽や承認文なく印刷に至る「黙許」という手口も珍しくはない。万が一、刊行された書物の内容に対して第三者から追及があったとしても、「正式に認可された書物ではないのだから、〈出版統制局〉は責任の外にある」という荒唐無稽な方便が成立してしまおうという訳だ。

「それこそ『特権階級』に便宜を図るための黙許が、ここへ来

て裏目に出るとはな。先鋭的な記事に気が向くあまり、魔術書であることを見落としたか。……」

「閣下？」

「あるいは——見落としたのではなく、『見逃された』か？」

「まさか……」

「たとえ魔力の性質を異にしようと、検閲官と同じ魔術師である我々の目に留まったことを踏まえれば、あり得ん話ではない。〈出版統制局〉は『万象の鑑』を魔術書と認識した上で黙許とした、とな」

絶句する補佐官を余所に、ペルグランが言葉が続ける。

「身内の無能か造反か、どちらにしろ面倒に変わりはないがな。

だがもしも後者だとすれば、事情によっては『その上』をも探る必要が出てくる」

「……この出版に、〈帝国記録院〉が関わっていると？」

「考えてもみろ。記録院はこの国で最も多くの『知識』と『秘密』を抱え込んでる。叛意に傾いた百科事典にとって、あれほどお誂え向きの火薬庫はない」

〈帝国記録院〉。その名の通り、九百年以上に及ぶ国家の一切を記録し、史料として保存する機関である。〈出版統制局〉の上部組織であり、その運営は「〈帝国〉」がノタウィア・マ

ニスのあらゆる国家に対して優位である」という前提で成り立ってきた。文字どおり「記録」を司る彼らの魔術の前では、既に起こったはずの事実も捻じ曲げられ、歴史上の改竄と抹消さえ容易い。

「今の記録院はもはや信用ならん。あの院長なら何を考えていたとしても領ける」

そう口にした一瞬、冷静なヘルグランがどこか鬱陶しげな様子を見せたかと思うと、閉じた事典を補佐官へ押し遣る。

「執筆に直接携わった者は無論のこと、検閲官から書籍商まで洗えるだけ洗え」机に肘を突き、空いた指を絡めた。

「『万象の鑑』を魔術書に仕立て上げた人間以外は捨て置いて構わん。記録院については別途指示する……奴等へは迂闊に近付くな」

「はっ。承知しました」

「……停滞期に乗じた騒乱が落ち着いたかと思えばこの有様か。こいつの正体を暴いた者には報奨を惜しむな」

標題紙には「文人たちの結社による編著」とあった。中には執筆者の一覧として三十名を超える名前が記されているが、筆名を用いたり、匿名で寄稿した者も少なからず居るだろう。魔術師には名を知られることを厭う者も多く、事典が禁書に

相当すると知りながら関わったのなら尚更だ。

全貌の見えない一派がこうして大々的に公刊を果たした以上、無暗に内幕を暴けば肩透かしを食らう可能性が高い。〈帝国〉の絶対的な帝政下において、魔術師のあらゆる職権には皇帝の名が付随する。とれほと身分の高い魔術師であろうと、行政機関が下した判断を管轄外から覆すには慎重さが要った。

「それからもう一つ……事典の『序文』だ。それを書いた奴は徹底的に調べ上げろ」補佐官が手に取った事典を顎で示す。

その先頭を飾っているのは、先人の歩みと未来への道程を輝かしく、そして堂々と礼讃してみた序文——ジル・デュブレなる筆者によるものだ。実名か筆名か、世に知られた名ではないが、ノタウィア・マニスの社会形成と学問の発展に関する論評の展開は巧みで、単なる美辞麗句ではない。

「この事典が連関によって効力を増すのなら、魔術を最終的に成立させるのは恐らく連環だ。どんな魔術書でも、始めの言葉を書いた者を警戒しておくに越したことはない。それに……その男曰く、『碧眼の異能者と無能力者の、格差なき真なる平等社会はやがて確実に実現する』らしい」ヘルグランは鼻で笑った。「まんまと読まされたな」

2 革命の兆し

事

典が〈帝国〉陸軍に静かな波紋を広げた日から、話は半年前に遡る。帝都に粉雪が降りしきり、間もなく年の瀬を迎えようとしていた頃だ。

街中ではある冊子が配布され、魔力の有無を問わず少ない人々の間に賛否を巻き起こしていた。『万象の鑑』の趣意書——予約購入者を募るために企画の概要を記した宣伝用のパンフレットである。第一巻の序文と同じく、趣意書の筆者もまたジル・デュブレであった。

刊行の予定は本文が十巻、図版が三巻。大著だが、百科事典の分量として見れば前例はある。だがこの出版前の時点で、『万象の鑑』は「魔力持つ者と持たざる者、その他身分や出自の一切を分け隔てなく尊重し、協同で執筆と編纂に当たる」という編集方針が掲げられ、従来の百科事典とは一線を画すことがはっきりと記されていた。

彼の「魔力は人類が等しく享受すべき共有の財産であり、魔術師と無能力者の協同で磨かれた学問と工学によって人の

世に還元されることが最善」とする主張は、〈帝国〉の知識階級からはまるきり非難された。

手始めに、国内で権威を誇る文芸雑誌『新評論』に抗議の手紙が掲載された。手紙を執筆したのは、国立の学術機関〈学堂〉に籍を置く魔術学者バトリス・フロケである。

フロケは建国以来〈帝国〉の礎となってきた選民思想、すなわち碧眼の魔術師を「天上の焔を宿した特別な人間」と解釈する「天授主義」の信奉者で、趣意書の主張を「反乱分子の陰謀」「奇を衒った暴論」などと一蹴する批判よりは苛烈を窮めた。フロケの弟子や同調した学者勢も次々と反論を發表し、『万象の鑑』は出版前だというのに数々の攻撃が加えられた。

見るからに前途多難と思いきや、内実は何とも狡猾だった。この趣意書には、あらゆる魔術的要素が一切含まれていなかったのだ。街の人々は謎の人物ジル・デュブレの朗々たる檄文にまず驚き、そしてフロケらの激しい反論に弥が上にも期待を煽られた。実際に購入するか否かはともかくとして、何事か言いようのない予感が去来したのは確かだった。〈帝国〉に大きな変化が迫りつつある——それが嵐とも一筋の光明ともつかず、今はまだ正体が判然としないにせよ。

事典の出版差し止めを狙ったはずの弾圧は、こうして皮肉にも恰好の宣伝となつてしまつたのだつた。

街路が計画的に敷かれた帝都の中心地から打つて変わつて、細く入り組んだ路地が交わる郊外の住宅地。光を撥ね返すような漆喰塗りの邸宅とは趣の異なる、煉瓦の無骨な壁面に雪がこびり付いている。通りには間口の狭い家々がひしめき合ひ、北国の乾いた雪が風に煽られて夜道を白く煙らせていた。

帝都は宮殿を中心に夜空を白ませるだけの魔導照明の技術を備えていたが、その光も「魔力を持たない者たち」の生活圏までは届かない。高い支柱から夜道を照らす魔方式の街路灯は郊外へ向かうにつれてその数を減らし、雪の降らぬ季節の間は家々の軒先に吊るしたランプの火で視界を確保し合うのが常だつた。

だが凍死者も少なくない厳冬ともなれば話は別だ。離れた空が茫洋と光る光景を尻目に、火を屋外へ出しておくことも俚ならない住宅地は日没とともに白い闇の中に沈む。

その夜も、家々の窓から蝋燭めいた光が見え隠れするだけで普段どおり暗かつた。古いアパルトマンの一室に、ぼそぼそと話し込む二人の男がある。元から狭小な部屋は、家中に

雑然と積み上げられた本の山々によつて余計に暗く、窮屈さを増していた。

食卓に向かい合つて座る二人のうち、一人は三十を過ぎたばかりと見える年頃の、癖の強い金髪を紫のリボンで束ねた男である。魔力のない緑の垂れ目に丸眼鏡を掛け、睨め付けるような眼差しをしている。ゆとりのあるリネンのチュニツクの重ね着越しにも窺える骨太の体軀から、彼が〈帝国〉人とは異なる出自であると知れる。

そしてもう一人は、丸眼鏡の男より七つか八つは年下の、明るい空色の瞳をした魔術師の青年だ。二人とも長身ではあるが、こちらの青年の方がいくらか背が高く、体格もすらりとしている。その顔立ちには、鷲鼻がやや目立つにせよ柔和に整っている。襟足を切り揃えた栗毛は緩やかに波打ち、手入れが行き届いて艶やかだ。室内用の上着を羽織つてシャツの衿元を寛げた風貌には清潔感があり、彼の育ちの良さを思わせた。

外見こそ共通点に乏しいが、二人とも右の手のひらや指に固い節を作り、彼らと文筆が切つても切れない関係であることが察せられる。卓上に開かれた複数冊の帳面はいずれも草臥れるほど使い込まれて、挟み込まれた紙片で厚みを増していた。

卓上に置かれた小型の魔導ランプは最新型で、出力を上げ

れば火をいくつも点したと紛うほど部屋が明るくなる。夜半の活動には便利だが、扱える魔力に乏しい周辺の環境を考慮して控えめな光量に抑えられていた。

「——フロケの爺様以来、大勢まんまと食い付いてくれたな。賭けにもなりやしなかった」丸眼鏡の男が、よく通る低音で碎けた言葉遣いを発する。

「冬が明ければ第一巻だ。腹ア決まってるだろうな、ユベール？ お前さんの大した筆力は重々承知しちやいるが」

ユベールと呼ばれた栗毛の青年が、人へ向けることに慣れた微笑みを零す。

「元より覚悟の上です。ウーヴェさんこそ、その魔法使いと紛う知識が臆して鈍りませんように」若く澄んだ声は穏やかだ。

「言ってくれる。伊達にお前ら魔法使いと一緒にアタマ張ってねえよ」ウーヴェが不敵に笑う。

「ふふ。余計なお節介でしたね」

語調こそしっかりしているが、彼らの身体は薄らとした煙草と酒の匂いを纏っていた。どうやら、どこぞの酒宴から早めに引き上げてきたらしい。

何気なく、二人して隣室へと顔を向ける。積まれた本や書類が堆く壁を埋め尽くしたその奥は、どうやら書齋である

らしい。そこには安っぽい机に抱き付くようにして眠る、もう一人の男の姿があった。毛布を掛けられた背は布越しにも薄く痩せて、死んだように寝息が浅い。

「ジルの奴。『少し寝る』とか言つて、起きてくる気配がねえな。酒の匂いの中であられちまったか」

「流石に疲れていたんでしよう、停滞期というのに働き詰めでしたからね。大事な時期だ、風邪を引かれては堪らない……そろそろ起こしてきます」席を立ち、眠る男の傍らへ歩み寄る。

「……ジル。ジル？ ほら、起きて。締切だよ。入稿。仕事の時間。……駄目だな、起きない。ジルー？」

ユベールが肩を揺さぶるたび、毛布からはみ出したぼさぼさの、赤みの交じった金色の短髪が波打つ。ジルと呼んだ男の顔を覗き込むと、ユベールはたちまち小さな悲鳴を上げた。

「！ ちょっと……あなた、涎……大事な手紙が！ ああもう、原稿が折れている……！」

時間帯を憚ったユベールの控えめな怒声を尻目に、ウーヴェは慣れた様子で手元の帳面に書き物を始めた。

ジルと呼ばれたのはつまり、彼こそが『万象の鑑』の先頭に名を記した渦中の男——のちにノタウィア・マニスの歴史に名を刻む、最高にして最弱の魔術師ジル・デュブレである。

この続きはぜひ本編でお楽しみください！

「……『万象の鑑』が完成すれば、本当に革新は叶うのでしょうか？」

「そうだ」メルルが即答する。「あの事典を以て、君たちが新しい時代を作るのだ」

——「孔雀の御旗のその陰で」

「貴様と『あれ』に関わった人間すべて、只では済むと思うなよ」

——「大図書館の虜囚は惑う」

「俺は人殺しのために研究してる訳じゃない」

「よく理解しているさ。お前の研究が、たまたま戦争の役に立つと分かっただけのこと」

——「ノートルヴィルの工学者」

その革命は、
「百科事典」の形をしていた。

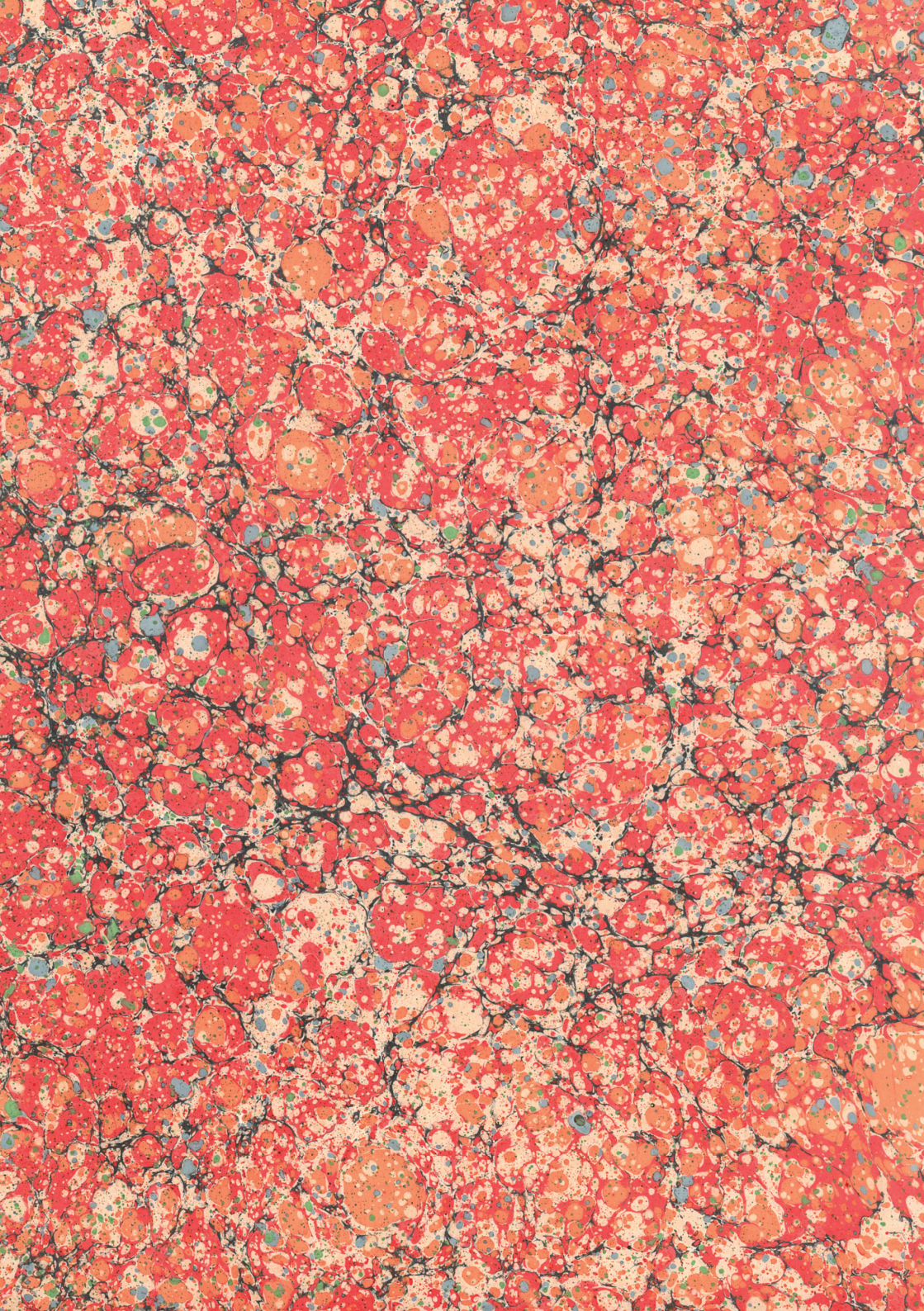
ばんしょうのかがみ
万象の鑑

卷之一 | 序論

Tome premier
—Discours préliminaire

文・イラスト
東風

A5判オンデマンド印刷 / 本文68ページ / 価格700円





Omniverse
2018